

# 時間作品，時間価値，時間享受（V）

武井勇四郎

序

第1章 運搬される時間情景

（第1節 モノ的時間 第2節 コト的時間 第3節 虚構の時間）  
（以上、第17巻第3号まで）

第2章 モノとコト

第1節 時間的对象とその位相 （本号）

第2節 時間質と展相質

第3節 コトの諸相

## 第2章 モノとコト

### 第1節 時間的对象とその位相

これまで第1章「運搬される時間情景」において車中で乗客がとる振舞いを〈モノ的時間〉と〈コト的時間〉に大別して、その特徴を述べてきた。〈虚構の時間〉を特別に設けたのはそれを実在的時間から峻別したいがため、無論、それが〈コト的時間〉の範疇に入ることはいうまでもない。ところで〈虚構の時間〉で大きな取りこぼしがあるのではないかと指摘する向きの人もいよう。音楽があるからである。最近、車中で長時間ヘッドフォンを耳にあてて好きな音楽を独り長時間楽しむ若者が増えていることはあなどりがたい情景である。筆者はこのことを決して失念してはいない。しかし、ここで音楽の時間構造の特性や聴者の享受の時間性的特質を論及するつもりはない。今のところ、残念ながらその力量は筆者にはない。ただ次の点だけは

ここで指摘しておきたい。

古来、音楽ほどすぐれた時間作品はない。純粹な時間芸術といえば音楽が筆頭にあげられるのが常で、またその資格を十二分にもっている。作曲家や演奏家は退屈な時間を魅惑の時間にする魔術師であり、非貴金属の時間を黄金の時間に造り変える錬金術師である。楽音を縦横に巧妙に組織すれば、妙なるリズムとメロディーが流れ、聴者を靈妙な境位の時間帯に誘い込む。もし乗客が退屈な時間を惧れるなら、しかるべき音楽演奏に同期しながら乗車時間を過すにしくはない。音楽的時間が至上権を得て無情な時間を制圧するからである。

音楽は世界を領している。職場にはバック・ミュージックが流れる、食堂にはムード音楽が流れる、フィギュア・スケートには伴奏音楽が用いられる、映画には効果音楽が用いられる、商店街に歌謡曲が響く、スキー場にも響く……。音楽的時間は音楽会場の独占物ではなくなり、可能な処ならどこへでも侵略し、恰も世界を音楽的時間で蔽い尽そうとしている。そればかりか音楽学、音楽美学の用語が他の時間的事象にまで侵蝕し、それが説明しにくければ、「リズム」とか「テンポ」とか「旋律」とか「転調」とか「変調」とかの音楽用語でごまかせばよい。それで能事終れりとする。そればかりか非時間的な空間的配置や空間的構造にまでこれらの用語は及ぶほどまでになっている有様である。こと音楽的時間にかんして、音楽理論は否定すべくもない威力をもってきている。

しかし、燦然と輝く音楽に眼を奪われて、当然注目されてしかるべき時間作品が視界に入っていない惧れはないか。爾来、身体運動の文化体としてのスポーツが時間作品として取り挙げられ、その時間構造がそれとして独自に研究されたことがあるのか。〈作品〉といえば芸術的作品のみが〈作品〉として資格をもつが、スポーツはどうして〈作品〉に値しないのか。一回限りで過去へと消えてしまうからか。既定の筋書きがないからか。勝ち負けといういわゆる「不埒」な価値が働いているからか。勝敗の価値は芸術的価値

（美醜）と背反するのか。しかし、妙なことに既にギリシャ時代に運動競技は音楽、演劇と並んで鑑賞の対象となり、ポリスの市民をオリンピック・スタジアムに惹きつけていた。決して〈作品〉でなかったとはいえないのである。前世紀末に復活した国際的なオリンピック競技は人類の祭典ともなっているし、今世紀半ばのマス・メディアの急速な発達には競技を大衆の享受対象に仕上げている。音楽や文学や演劇などに専門的作家がいるように、今やスポーツにも専門的な競技者がいるのである。このことは何よりもスポーツが〈作品〉になっていることを物語っていよう。既に〈作品〉として市民権を得ているのに、依然としてそれとして評価されずにいるのはいかばかりかの偏見が働いているか、それとも時間作品の範疇を狭め、時間作品が内具する時間価値を度外視しているかである。偏見はまた後者のことと密接につながっているので、われわれの任務は、スポーツを時間作品の一つとして捉え、ある具体的なスポーツを通じてその時間の構造と時間の価値を鮮明にすることである。

しかしながら、それにただちに移る前にまだいくつかの予備的考察が必要である。身体運動としてのスポーツが時間の〈作品〉であるなら、それは時間的対象として把握されねばなるまい。物的対象と異なる時間的対象とはいかなる構造をもつのか。これは是非とも明らかにしておかなければならない事柄である。この「モノとコト」の章で、時間的対象とそれを構成する位相、位相がもつ時間質の体系、諸々の位相の推移形態質としての展相質、実在的世界の過程的事態と志向的世界のそれとの相違、両者の混成体の様式が明らかにされよう。

本節の主題は時間的対象とその位相である。時間的対象の形相は物的対象のそれと根本的に異なる。例えば、石が高所から地面に落下するとすれば、われわれは石とその落下との違いを直観的に見て取っている。また競技者が百米走るなら、競技者とその走行との間に本質的な差異がある。石や競技者

が物的対象であるのに対して、落下過程や走行過程は時間的对象であり、両者の相互還元は不可能である。野球のような敵対チームの多数の競技者によって行なわれる一回から九回までの試合過程ともなれば、〈モノ〉としての競技者と〈コト〉としての試合過程との形相上の違いはもっと歴然としてくる。多数の競技者が一つの試合をつくるのであって一競技者が一試合をつくるのではないから、試合の競技者からの超越性もっとはっきりする。そしてこの試合は一瞬の出来事ではなく、ある時点からある時点までの時間経過において成立する類のものである。物的対象ならそれを構成している諸部分や諸性質は同時的に存在し得るが、時間的对象の場合そのようなわけにはいかない。そこで時間的過程にとって特有な概念である位相について論及する必要がある。

位相 phase の語は現在いろいろな学問分野で多様に用いられているが、この語はギリシャ語に由来し、「頭われ」とか「象」の意味をもっている。人類は逸早く月の輝きの象の周期性に気づき、年間を測る尺度に用いている。ドイツ語に *Monadphase* の語がある。日本語にも「月相」の語があり、現在でも月齢として暦の上で用を達している。天空にかかる月の盈ち虧けは、無論、天文学的光学的現象できわだった時間的な事象であるが、月の輝きの相には一定の推移形態が見られる。大雑把にいって、新月→上弦の月→半月→満月→半月→下弦の月→新月といった過程をもつ。その変移は連続的で且漸次的で周期的である。この新月、三日月、半月、満月が月相の主たる呼び名であるが、厳格にとれば無限にある。それぞれの月相はその変移過程の中に厳格に位置づけられているので、月相とはある位置を占めている月の形姿といってよい。満月が一夜、東の空から西の空へかけめぐっても、月の形姿に変化は見られないから、この満月の空間移動を月相の推移と見做すわけにはいかない。この変移過程は天文学的に見て周期的であるから、どの月相を初位相においても終位相までの時間間隔はいずれも同じである。つまり満月から次の満月までにしようと、新月から次の新月までにしようと、半月

から次の半月までにしようと、地球の昼夜交替の約三十回分に相当する同じ時間間隔なのである。しかし、後に詳述するように変移過程の長さは同じであってもどの月相を初位相におくかによって、月相の推移の順序形態はそれぞれ異なることになる。この過程全体の推移形態を展相と命名しておこう。つまり展相は初位相から終位相までの諸々の位相の継起順序が作りだすまとまった一つの過程の相である。従って満月を初位相に置くか新月を初位相に置くかに応じて展相は異なる質をもつといえる。時間質と展相質については次節で詳述する。

『大学』に「物有<sub>レ</sub>本末<sub>一</sub>、事有<sub>レ</sub>終始<sub>一</sub>」とあるが、前半は物的対象を、後半は時間的対象を的確に表現している。後半の「事」は事象ないし事態を一般的に規定しているのではなく、始めと終りのあるような、少なくとも二つの位相がある一つの過程的事象ないし過程的事態を規定している。例えば、赤球が白球に衝突するような場合、その衝突は一瞬の出来事（事態）であって、巨視的視点から見れば過程はなく、従って位相はない、またある時点からある時点までの時間経過にあって赤球が同じ形態、性質、状態を持続するなら位相はない。変化がないからである。この赤球は物的対象として把握されるのが普通である。

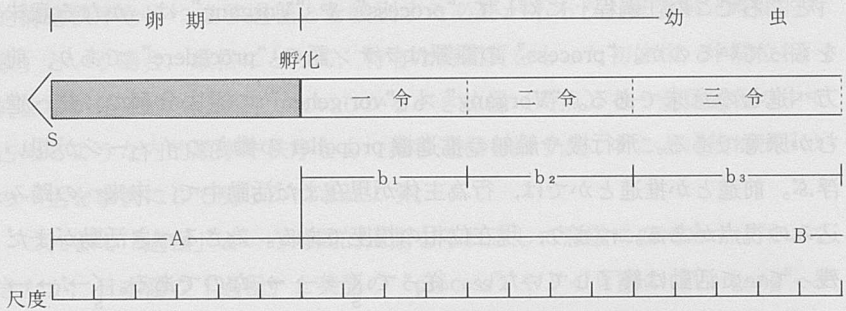
さて月相の変移過程の場合、初位相にどの月相を定めてよいということは、どの月相の初位相も終位相にもなり得ることを意味するので、この変移過程には生物に見られるような〈誕生→成長→死〉のような過程がないことになる。何故ならば月相の変移過程にあっては〈満月→新月→満月〉も〈新月→満月→新月〉も成立するが、生物の場合〈成長→死→誕生〉は成立しないからである。従って月相の変移過程にあっては本来の真の初位相はないといえよう。物理現象にはこのような事象が多い。周知のように、水  $H_2O$  は固体（氷）、液体（水）、気体（水蒸気）の三つの相をとり得るが〈固体→液体→気体〉の過程もあるし、〈気体→固体→液体〉の過程もあるし、その上尚これらの逆コースもあり得るのである。従って単なる推移過程と特有な内

的構造秩序をもつ推移過程とを峻別する必要がある。筆者が「時間的対象」という場合、厳格にとって、特有な時間質をもった初位相、中間位相、終位相が任意的や恣意的でないしかるべき位置（時点）を一全体過程の中で占めるような内的順序や秩序をもつ推移過程を指す。このことは後にチョウの一生を事例にして明らかにされよう。

これまで「過程」という時間的用語をそれとして意識にのぼせずに用いてきたが、日本語の「過程」と英語の“process”やドイツ語の“Vorgang”との間には大きな視点の相違が認められる。「過程」は文字通り、過ぎ去った<sup>みちのり</sup>道程、行為主体ならこれまで歩んできた行程である。「過程」には行為主体が既に行為を終え、終えた時点で回顧的に来し方を客観的に对象的に眺め渡す視点がある。山登りなら、登山者が山頂に登り着いて一服しながら、これまで苦勞して登ってきた長い道程を遠近的に俯瞰する視点がある。山頂に立つまでは全体的過程の展望は産まれない。この視点はまた第三者的にも可能であり登山当事者でなくともよい。つまり、位相の全推移——初位相から中間位相を経て終位相まで——をある距離を置いて純客観的に眺め渡す観察者の視点も可能である。〈A→B→C→D〉を既に完結した一全体として見る立場で、進行中の位相からその位相の前後を見る立場ではない。Dの終位相が終了した時、その時点で〈A→B→C→D〉はまとまった一つの過程の全体として成立する、しかし、成立すると同時に全体としてもう過ぎ去る運命にある。Sは開始、Eは終結の記号である。〈<sub>S</sub>→→→<sub>E</sub>〉が時間的対象であり、〈<sub>S</sub>→→→<sub>E</sub>〉はつくりつつある時間的対象であり、いまだ完結していないことを意味する。〈<sub>S</sub>→→→<sub>E</sub>〉が一全体として成立するのは終位相が終結した時点であるが、〈<sub>S</sub>→→→<sub>E</sub>〉は物的対象のように時間の中で持続せず、それとして過ぎ去る。にも拘らず、認識者（当事者や第三者）が、それを一つの全体として何故把握し得るかの問題は認識論上の大きな問題であり、今ここでの関心事ではない。物的対象の認識と違って時間的対象の認識は厄介であることを指摘するにとどめておこう。

ところでこの「過程」に対して“process”や“Vorgang”はいかなる意味をもっているのか。“process”の語源はラテン語の“prōcēdere”であり、前方へ進むの意味である。“Vorgang”も“vor-gehen”の過去分詞で、前へ進むが原意である。飛行機や船舶の推進機 propeller の働きのイメージが思い浮ぶ。前進とか推進とかでは、行為主体が現在まだ活動中で、未来への踏み込みの視点がある。つまり、現在位相の視座である。為さるべき活動がまだ残っていて活動は終了していない。従って  $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle$  <sub>S</sub> なのである。 $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle$  <sub>S</sub> が完了体であるとすれば、 $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle$  <sub>S</sub> は現在進行体である。後者にあつては時間的对象はつくられつつあり、現在位相が過去位相をひきつれ前方に未来位相を控えている。従って一過程全体として推移形態は未完であり、展相は完成していない。展相は終位相が終結した時点で成立する類のものであるからである。 $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle$  <sub>S</sub> <sub>E</sub> はまとまった一全体としてある特性をもつ完結した一過程であり、その特性は諸々の位相が推移していく中で形造られ終位相が終結した時点で完成する。 $\rightarrow$  が展相である。 $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle$  <sub>S</sub> にあつては全体的特性は出尽しておらず、形成中のものにほかならない。

ベルグソンは時間や運動を幾何学的軌跡に図化するような観察的立場を思考の硬直化として強く非難した。それに対して一瞬一瞬の生物的な動的創造的飛躍を重視した。これは現在の進行位相を「創造的進化」の原動力に仕立て絶えず前方へ前方へと推進していく現在位相の立場である。このベルグソンの見解は、既に出来上った時間作品や時間的对象ではなく、出来上りつつあるそれにとっては極めて重要である。既に勝負事において述べたように、時間的对象を創り出す当事者とか、その創られつつある作品現場に臨んで觀賞する享受者にあつては、終位相が終了した過程よりも、現時点で何をすべきか、これから何をすべきか、あるいはこれからの成行きはどうなるのかが注目の対象である。残されている未来位相をどう将来するか、どう創り出すかが勝負の関心事である。野球試合において、終了した試合が進行中のそれよりも興味が半減するのは、勝敗の行くえはもはやなく、最終回の攻防で決



定済みであるからである。勝負事では未来位相に勝敗がかかっている内が試合であって、既に出来上った「筋書き」の再演や復元は勝負ではない。もしあらかじめ「筋書き」が用意されているなら人は勝負を行なわないし、それをまた観賞しないであろう。勝負がついた時は、もう未来位相は消滅しているのである。野球がよく「筋書きのないドラマ」であるといわれるのは、この辺の事情を衝いているのである。「筋書き」が出来上るのは終位相の終結と同時であるが、この筋書きは関心の対象にはなりにくい。何故ならば既決済みの勝負は、真の意味での勝負ではないからである。勝負事にあっては推移する位相そのもの、位相の推移そのものに本命がある。この意味で  $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle_S$  ではなく、 $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle_E$  なのである。野球試合は、延長戦を除けば、無限進行ではなく、九回までという枠組がはめられている。そのため進行中の試合には  $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle_S$  の出来上るべき時間的対象が予想され、現在位相  $\rightarrow$  はその全過程の中で位置づけを得る。われわれが経験しているように、始まったばかりの回における残された回（未来位相）の重みと、回がかなり進んだ時点での残り少ない回の重みとは異なる。この重みは現在の攻防（現在位相）に過ぎ去った回（過去位相）の重みにも増して重くのしかかる。別言すれば現在位相は過去位相の成果をひきずりながら、試合全体の完結を予想しながら未来位相の圧力を受けるのである。確かに試合過程は全体的に完結していない。しかし、完結していないが完結さるべきもの



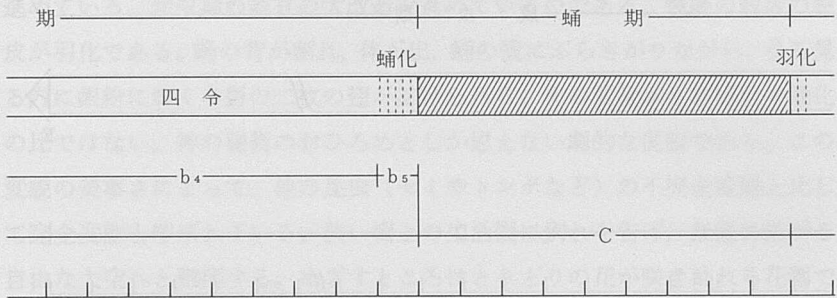


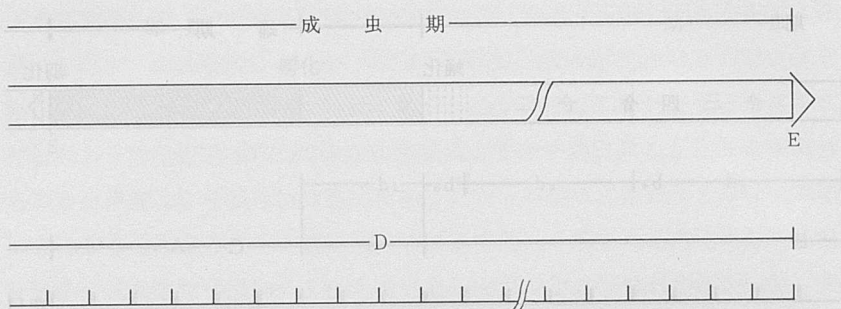
図 式 I

として全体的に時間的対象として枠づけを受けている。その枠の中でそれぞれの位相はその構成の持ち分をあらかじめもっている。ただ未だ遂行されていないのである。完成している音楽作品や映画作品であれば、その枠組は楽章や構成によって決まっていてそれぞれの位相の持ち分も厳格に秩序づけられている。枠づけがあることと過程が完結しているか否かとは別の事柄である。野球の試合開始以前に予想される時間的対象は  $\langle \overset{S}{\rightarrow} \rightarrow \dots \rightarrow \overset{E}{\rightarrow} \rangle$  としてあり、その諸々の位相も位置づけを受けている。

過程か位相かという二者択一や二律背反の思考法は拒けるべきである。むしろ時間的対象としての過程とそれを構成する位相との内的な構造を明かし、とりわけ位相の推移が時間的対象全体にいかなる性質、特性をもたらすか、また現在位相、過去位相、未来位相の三者相互にいかなる関係があるかを明確にすることが必須である。このことを具体的に説明するために生物界に事例を求めるとよい。変身に変身を重ねるチョウの一生はわれわれに非常に多くのことを教えてくれる。尚、生物という実在界に例を求めたのは、言語によって構成されるか、約束事によって枠づけされる時間的対象と比較照合したい含みもある。

上図式は一日を時間尺度にとってつくったアゲハチョウの一生の形態上の推移の図化である。言語的に表現するとあらし次のようになる。

親のチョウによって新葉に産みつけられた小さな卵は、約一週間ほどで孵



化する。孵化直前に卵は急に黒みを帯びるが、外形上の変化はない。卵殻内で小さな幼虫となって殻を食い破り外に出る。これが孵化である。外に出た幼虫は残りの殻を栄養分として食べる。孵化は静から動への移行である。幼虫は周辺の葉を食べる食草生活に入る。この生活期間は卵期の三倍の約三週間である。俗にいうイモムシとして大きく成長するわけだが、成長に伴って五回脱皮しなければならない。孵化したばかりの幼虫を一令、脱皮毎に二令、三令、四令、五令と呼び、五令は蛹化への準備となる。脱皮はいわば成長のリズムであり周期性をもつ。四令ともなれば幼虫期全体の80%ほどの葉を食べる大食漢となる。天敵から身を守るため幼虫は環境の色と同じ色を保ち、時によっては擬態の振舞いをしたり、肉角を出し悪臭を発ったりする。周辺の葉を食い尽せば、別の枝に移動する。しかし、その行動領域は樹上に限られている。外器官の点から見ると、眼は単眼、口、胸足6、腹足8、尻足1で、外見上、成虫に見られる翅、触角、口吻、複眼は見当らない。

前蛹では二日間ほど食を断ち、適当な小枝を探し、台座をつけ二本の帯糸で体を小枝に結びつける。約十時間ほどの激しい動きで幼虫の最後の脱皮を行う。これを蛹化という。これまでの動きに終止符を打ち、再び静かな時期に移行する。蛹期は彫刻の期間ともいえよう。蛹は現代彫刻家顔まけの二本の糸で宙づりになっている抽象的オブジェである。その展示期間は卵期とほぼ同じ十日間ほどである。しかし、この期間中に大変身を行なう準備を中で

進めている。幼虫期の器官の大改造を進めているのである。最後の最後の脱皮が羽化である。蛹の背が割れ、体が出、蛹の殻にぶらさがりながら、見る見る内に銀粉に輝く多彩の二枚の翅が拵げられる。その変身ぶりは孵化や蛹化の比ではない。神の秘術のおひろめとしか思えない劇的な変貌である。この変貌の美事さによって、他の昆虫（セミやトンボなど）の不完全変態と比して完全変態と呼ばれている。狭い樹上の生活圏に別れを告げ、無限に広がる自由な大空へと飛翔する。めざすところはとりどりの花が咲き乱れる花園である。そこでは異性が愛を待ち受けている。花から花へ蜜を求め、愛を求める。愛の乱舞に続いて交尾となる。次の世継ぎをつくるべく産卵し、約三週間ほど自由奔放に飛び廻ってこの世を去る。この期間は幼虫の期間とはほぼ同じである。卵から成虫の死まで約二カ月である。これがチョウの一生である。

注意しなければならないが、先きの図式はチョウの形態上の、それも主として外面的形態上の特性によって図式化されている。別言すれば  $\langle \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle_S$  は形態質の変移過程である。時間的対象は  $\langle \xrightarrow{S} \xrightarrow{E} \rangle$  である。おおまかな位相は、卵期、孵化、幼虫期、蛹化、蛹期、羽化、成虫期である。位相の推移方向は  $\rightarrow$  で示される。展相は  $\longrightarrow$  で示される。

このチョウの一生の変移過程と先きに取り挙げた石の落下過程とを区別しておかなければならない。石が高所から地面に落ちると、落下過程が生じる。その位相の推移を特徴づけているものは落下する石の速度の相違で、石の形態上の変化ではない。もし石が落下途中で空気の摩擦で燃焼してしまうなら、地面までの落下過程は成立しない。従って落下過程が成立するためには落ちる主体（＝石）が、着地まで何らかの意味で同一性を保っている必要がある。その時に初めて落下過程を速度の変化で示し得るのである。もしエネルギーに止目するならこの石の落下は位置のエネルギーの速度のエネルギーへの移行ということになり、また摩擦による燃焼なら力学的エネルギーの熱エネルギーへの変換となろう。石の落下過程はエネルギーの変移過程と全く別個にあるわけではなく、速度に目をつけるかエネルギーに目をつける

かによって決まってくる。複雑な複合的な過程から落下過程を抽出するのは認識の抽象作用による。位相の質料に何をとるかによって過程の実質が決まってくる。先きのチョウの一生の図式化にあっては、成長過程が抽出されているが、その位相の質料は主として形態で、卵期の卵形、幼虫期のイモムシ形、蛹期の蛹形、成虫期のチョウチョウ形の推移となる。これが完全変態として注目されるのは四つの形態上の質が全く異質であるからである。同じ個体が何故このような外形上の表現形式をとるのか、その生化学的、遺伝形質的問題はここでの問題ではない。一時間的対象としての一過程が、少なくとも二つ以上の位相によって構成されていて、その位相は次節で詳述する時間質（時相質、機能質、間隔質、単位質、変化質、密度質、状態質、速度質、進捗質、継起質、周期質、方向質、緊急質、適時質、組織質、層序質）によって特徴づけられる。そして諸々の位相の推移形態は全体としては展相質を形造る。

石の落下運動の場合、その落下過程は速度の質の推移で把えられ、運動（落下）する〈物〉は石であり、その外形、質量、組成等の基本的性質（本性）は変化することなく同一性を保つ。あるいは、競技者が百米走るなら、その走行過程は速度の質の変化として把えられる。その走行過程をつくっている主体は〈者〉としての競技者である。この〈者〉は何回となく走れば、その度に走行過程をつくることができる。この意味で〈者〉が変化して、例えば競技者が物理学者に変身するわけではない。これに反してチョウの一生の場合はどうか。その一生は変身の過程である。種的には同一の個体であっても、幼虫期のイモムシの有する諸性質は成虫期のチョウチョウの有する諸性質と顕著に異なる。片や食草の青ムシであるし、片や蜜を吸うチョウチョウである等々。各期（位相）の推移に伴なって獲得してくる性質もあるし失ってしまう性質もあり、外見上、同一性を保つ〈物〉は見出しにくい。にも拘らず、チョウの類ならどの個体も〈卵期→幼虫期→蛹期→成虫期〉の過程をたどるのである。このチョウの成長過程の全体的特性が、〈生物〉として

のチョウの欠くことの出来ない本性である。この本性は各期の担い手（幼虫期ならイモムシ）の諸性質に還元され得ない  $\langle \overset{S}{\longrightarrow} \overset{E}{\rangle}$  が全体として有する特質である。従って  $\langle \overset{S}{\longrightarrow} \overset{E}{\rangle}$  はこの特質の主<sup>スシ</sup>、つまり主体である。この主体は終位相の成虫期が完結した時に初めて成立し、と同時に  $\longrightarrow$  の展相の質も仕上げるのでその所有の主<sup>スシ</sup>となるような主体なのである。従って非時間的な物的対象の性質（例えば、石の重量とか容積とか化学的組成とか、あるいはイモムシの身長とか色彩とか草食性とか）の主<sup>スシ</sup>とは形相上本質的に異なるのである。 $\langle \overset{S}{\longrightarrow} \overset{E}{\rangle}$  は展相質の主体である。各期の担い手と  $\langle \overset{S}{\longrightarrow} \overset{E}{\rangle}$  の主体とを混同してはならない。担い手は変身しながらも成虫の死まで持続している。物的対象は展相質の主体とはなり得ない。例えばある時点からある時点まで石が一定の空間的位置にとどまって、いかなる性質にも変化が見られないなら、位相はなく、よって展相は存在すべくもない。つまり、逆転して位相や展相のないものを物的対象<sup>エ</sup>と見ればよいのである。位相がないのに《ある時点からある時点まで》という表現は形容矛盾のように感じられようが、この時間的梁間の設定はそのもの以外の変化するものによる設定で、元来相対的で比較上のものである。「石が丸一カ月同じままである」という表現で「丸一カ月」というのは月の満月から次の満月までの推移か、地球の昼夜の三十回の交替かの変化あるものの尺度が前提されている。その変化と比べて石はその期間何ら変化していないのである。変化のないものを変化のないもので比較対照するすべはない、丁度、世界が灰色一色なら灰色であるといえないと同じである。従ってある時点からある時点まであるものが同一的に持続するのを「持続過程」というなら、全過程の中の部分的過程と見做すべきで、それを一全過程と見做すなら、言葉の正しい使用法ではない。むしろ「持続期間」とか「状態」とかと表現すべきであろう。なによりもまず過程は二つ以上の位相から構成されると見るからである。

ここで位相の推移構造について言及しよう。チョウの一生を形態変化の期間で図式化すると、



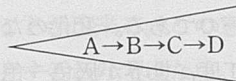
となる（尺度単位は一日）。位相には時間間隔質は不可欠で上図式では空間的長さに置き換えてある。Aの卵期とCの蛹期はほぼ同じでBの幼虫期とDの成虫期に比べて短い。各期の継ぎ目の孵化、蛹化、羽化は急激な変化をするが切れることはない。つまり各位相は連続的である。初位相のAは親の産卵とつながっているのに対して終位相のDは個体の死で終り、続く位相はない。位相の推移順序（継起順序）はA, B, C, Dであって、相互交換は不可能である。また、順序に方向質があって不可逆である（生物はすべて不可逆である）。推移順序は空間的配列ではなく、進行中の位相の内に常に先行の位相が内包されるような膨張的推移である。こうもいってよければ風船が絶えずふくらんでいくか、2の中に1が含まれ、3の中に2が含まれて1→2→3→4……といった有様である。従ってA→B→C→Dと表記するよりは、むしろ

$$|(A \rightarrow B)| \rightarrow |(A+B) \rightarrow C| \rightarrow |\{(A+B)+C\} \rightarrow D|$$

とか、

$$\{(A \rightarrow B) \rightarrow C\} \rightarrow D$$

とか、



とかの累層的、遠近法的、膨張的、積分的推移である。チョウにおいて幼虫から蛹を飛び越して成虫になった例は皆無である。外気の温度の高低によって蛹期は多少増減はすることはあっても蛹期を通過せずに成虫とはなり得ない。

近年の情報理論の発達に伴なって program, programming の用語が頻用されている。これは進行手順の表記の意味である。計算機なら作業手順のこまかな記述符号である。これと位相の継起順序とを同一視してはならない

し、混同視してもならない。最も日常的に見られるのはテレビやラジオの番組 program である。これは様々な放映放送項目を午前午後に時間的に割り付けたものである。各番組の内容は前後の番組のそれに有機的関係をもっていない。事情によってはある番組を中止したり、別のものと組み替えたりすることも可能である。今、仮にチョウの卵の中に成長過程のプログラムが遺伝情報的に内蔵されていて、このプログラムと個体の実際の成長過程とが相関的ではあっても、前者はあくまでも情報上の進行手順であって、現実的な成長過程そのものではない。いかに進行手順が厳密に有機的につくられていようとも、それが即成長過程と同一視はされない。生物の成長はプログラムの外に環境という外界と実的關係をとり結ぶ。プログラム、つまり進行手順が内蔵されていても外界がその発現を阻むなら、プログラムは予定通り進行しないで、混乱するか中座しよう。チョウの位相の実的な推移は外界との実的な関係の中で遂行されるから純然たる情報的な手順ではない。しかし、内蔵されているプログラムの役割を軽視するなら、どのチョウの個体もたどる同じ推移形態（ $A \rightarrow B \rightarrow C \rightarrow D$ ）は説明がつかなくなろう。この外界とプログラムの関係は生物学上の問題であってわれわれの問題ではない。

また行列進行 procession というのがある。これはデモ行進に見られるもので、前後左右の空間的配列関係を保って行列が全体として前進する事象である。これも位相の推移とは直接の関係はない。時間経過に伴って出来る行列とか、先着順等については次節の時間質で説明する。

ともあれ、位相の推移構造の究明において重要な役割を示すのは、process や Vorgang の説明で指摘しておいた進行（現在）位相を中心に置いた前後位相の基礎づけ関係、つまり位相の機能である。現在位相、過去位相、未来位相の三者の相互関係は存在論的にいかなる関係にあるのか。注意あれ！ 存在論的關係であって、認識論上の回想とか期待とか記憶とか把持とか予持とかの関係ではない。

欧米語では現在形，過去形，未来形があり，時を三つの相に区別してい

る。筆者はこの三つの相を時相質と名づけておく。この時相質は存在様式上の差異であり、認識論上のそれではない。では現在位相はどんな在り方をしているのか。これから始めよう。事を具体的に説明するために先きのチョウの一生に事例を求めることにしよう。今、蛹期を現在位相に置くなら、 $\langle A \rightarrow B \rightarrow C \rangle$  であり、AとBは既に過ぎ去った位相となる。図式は空間的に表示したため、AとBが残存しているか保持されているように見えるが、実は現に存在するのはこの蛹期をつくっている蛹という外形物（担い手）である。もし同じ個体でAとBとが残存しているとすると同一の個体が三つに核分裂を起し、卵と幼虫という〈モノ〉が蛹という〈モノ〉と同時に三つ存在することになろう。過ぎ去ったものがどんな在り方をするかはすぐ後に述べることにして、蛹期は九日間という幅をもっている。それは蛹という〈モノ〉がその間同一の外形を持続していることを意味する。無論、蛹内では生態学的変化が起っていることはいままでもない。九日間を“現在”というのはおかしいではないかという向きの論者は、“現在”を何か一瞬の幾何学的点（位置だけあって幅も面積もない）であると想定するからであろう。この想定に立つと現在は幅のない針の先端となり、われわれ人間も人間存在もこの先端ということになり、およそ存在といえるのか怪しくなろう。何故なら何億分の一秒、そのまた何億分の一秒も一瞬であって、あげくの果てはゼノンのパラドックスのように運動も時間も無いということになろう。この立場を離れるには蛹期の九日間は外現している上部位相で、その下部に更に細部の位相を設ければよい。しかし、下部位相の一位相を現在位相とするには当らない。もしそうすれば蛹期は一過程となり、概念の混乱を招くだけである。蛹期はあくまでも  $\langle \overset{S}{\rightarrow} \overset{E}{\rightarrow} \rangle$  という一過程の一位相であって、一過程ではない。勿論、人は蛹化の十時間ばかりを蛹化過程として、そののみを考察の対象にし得るが、その過程は  $\langle \overset{S}{\rightarrow} \overset{E}{\rightarrow} \rangle$  の全過程ではない部分過程といえよう。

現在位相のなによりの特徴は、現下、活動中にあるということである。現に蛹内では様々な生化学的、生態的变化が生じていて、それはかつての幼虫



のそれと性質を異にしている。卵期, 幼虫期の過去位相は既に活動を脱して  
いて, 今は活動していない。つまり, イモムシとして葉を食べたことなどは  
現下の活動ではない。そして成虫期の未来位相は未だ活動していない。つま  
り花の蜜を吸ったり, 交尾したり, 産卵したりする活動は未だない。現在位  
相としての蛹期は図式化すると  $\langle \xrightarrow{S} \rightarrow \rightarrow \rightarrow \rangle$  であり, 卵期と幼虫期を經由して  
きている。卵期と幼虫期は既に過ぎ去った位相であるが, その推移主体は外  
形を変えても(変身しても)現在位相の蛹期の終りまで時間的に持続してい  
るのである。従って現在位相の担い手(推移主体=蛹)の中にプログラムは  
内蔵され, それに応じて外界との関係(新陳代謝)でこれまでに獲得された  
諸々の性質は保持されているのである。この担い手(推移主体)はチョウと  
いう類的本性とこれまでに獲得された諸々の性質の主<sup>メシ</sup>であって, 両者が一体  
となって現下の活動の能力をつくり出しているのである。換言すれば〈モノ  
〉としての蛹は, 推移主体であるだけでなく, 活動主体, 活動能力を保持  
している存在である。この〈モノ〉としての活動主体(推移主体)と  $\langle \xrightarrow{S} \rangle_E$   
の過程の主体(時間的対象)とを混同してはならないことは先きに指摘して  
おいた。生物にあっては推移主体抜きでは  $\langle \xrightarrow{S} \rangle_E$  は成立しない。丁度, 石  
という運動主体なくしては落下過程が, 競技者という走行主体がなくては百  
米の競走過程が成立しないと同一である。石や競技者は落下過程に, 競走  
過程に外形上同一性を保ち変身などしないのに反して, チョウはその成長  
過程で三度変る。変っても過程の担い手が不在であることにはならない。こ  
のような主体を筆者は推移主体と呼ぶのである。推移主体の有無を浮き立た  
せるために次の事例を比較してみよう。同じ一本の桜が春に蕾をつけ, 花を  
咲かせ, 実をつけ, 夏に葉を繁らして枝を伸ばし, 秋に紅葉し, 落葉するな  
ら, ここには主体がある。これに反し, レンギョウが咲き, モクレンが咲  
き, フジが咲き, 夏ツバキが咲き, サザンカが季節的に順次咲いたとして  
も, そこには同一の主体がない。色々な花の咲き方に推移はあっても推移主  
体はない。前者は植物的過程であるが, 後者は, どの花も植物だが, 色々な

花の開花過程であって植物的過程ではない。桜の木の場合、花をつけたり枝を伸ばしたりなどしても春から冬まで木として持続している。それに反して色々な花の開花過程では、花という点で統一性はあっても一本の同じ木が持続しているわけではない。筆者がわざとチョウの一生を時間的対象の事例として取り挙げるのは、〈モノ〉と〈コト〉の不可分離な関係を浮き彫りにしたいからである。このことは第3節の〈コトの諸相〉でもっと詳しく説明するが、敢えて先取りして端的に述べるなら、石が落下するという事象は、文でいうなら「石が落下する。」という文の一全体であって、「石」という名詞主語でもなければ、「落下する」という動詞述語でもない。それらは単語であって文ではない。「石が……」でも「……が落下する」でも事象は成立しない。まさしく一文としての「石が落下する。」が事象の資格を得るのである。単語が言であるのではなく、文が言であるから、言としての文が、事としての実在的な事象の相関者(志向的相関者)たり得るのである。筆者が「文でいうなら」というのは決して偶然的な思い付きなのではなく、文構造が〈モノ〉と〈コト〉の不可分離な関係を美事に表現しているからである。

過程や時間的対象における推移主体の役割がわかったので、現在位相と過去位相との関係について言及しよう。筆者は既に「考え事」の節で事実としての過去と記憶としての過去の峻別について縷説した、その混同が存在論上大きな誤謬をもたらすことも指摘しておいた。過去位相を論及する際、記憶としての過去は論外である。というのは成長プログラムが遺伝情報としてチョウの卵に内蔵されているにしろ、蛹の活動が、人間のようにこれまで経験したり体験したりしたことどもの回想や記憶に媒介されているなどとは想定しにくいからである。果して成虫のチョウはその前身の幼虫としてイモムシや蛹を自己認知し、記憶しているであろうか。疑とするに十分である。情報理論における feedback の情動的機能を人間的レベルの記憶作用や回想作用の意識的機構にまで高めるのは無理であろう。

蛹期の現在位相は光の如き活動性を有するのに対して、既に過ぎ去った位

相は影の如き脱活動性を有する。過去位相は無や虚無であるのではない。かつて活動性を有して今は活動していないが、かつての現在位相を基礎づけたものである。この意味では現在位相はかつての現在位相に基礎づけを受けている。位相の断絶のない連続性のため、幼虫期は直接に蛹期を飛び越して成虫期を基礎づけることはない。卵期の初位相は一見して何ものによっても基礎づけを受けていないように見えるが、実は親によって基礎づけられている。生物の類の継続性は親子の世代交替による。しかし、個体の成虫期の終位相はその固体の死によって終結するから、後続の位相を基礎づけることはない。そして現在位相は既に過ぎ去った位相を基礎づけることはない。それは推移の方向質があって不可逆であるからである。文学作品なら、諸々の文は離散的な線条的配列となり、最初の文は一見して何ら基礎づけを受けないように見えるが、後続の、しかもかなり離れた文によって意味的に基礎づけを受ける場合があり得るし、最後の文でも先行の文を基礎づけ得ることがあり得るので、位相の基礎づけ被基礎づけの関係は大変複雑な様相を呈する。従って文脈は一方向的脈絡ではない。この点で文学作品の擬似時間（文の継起順序）の位相の進展は、生物のような位相進展とはならない。音楽、映画、演劇等において位相の基礎づけ被基礎づけの関係はそれぞれ固有の形態をとると思われるが、ここで論及すべき問題ではない。

ともあれ、位相は動機づけとか原因的とか条件づけとか結合的とか、受動的とか能動的とか、関係づけとか秩序づけとか等の機能質を有しているのである。現在位相と未来位相との関係を論及する場合も、このような機能質の視点から考察さるべきで認識論的に論及すべきではない。

蛹期の現在位相から見れば卵期や幼虫期は既に過ぎ去って取り戻しようがなく、やり直しがきかなく、しかも今更どうにも変更の出来ない既済済みのこと、この意味では現在位相の在り方とは異なる。それに対して「明日のことはどうなるかわかるものか」という表現には、少なくとも過去位相の在り方とは違った未来位相のそれが見て取れる。ややもするとあやふやで

“無”ではないかと思えてくる。一応過去存在を影のように認めても、未来存在を認めない人が多い。ここでは宗教的な来世のことをいっているのではない。アウグスチヌスは、現在の現在、現在の過去、現在の未来といって、すべての存在を現在に集中し、過去も未来もいわば虚無に仕立てた。現在における過去の回想、現在における未来の期待というように意識作用を現在に集中するのならこれで結構であるが、既に述べたように過去存在と記憶や回想とは同一物ではないし、未来存在が期待や不安と同一物ではない。現在位相の担い手である蛹にとって、来たる成虫期は期待という志向の対象などではなく、実的に到来する事実（実在的な事柄や事象）である。人間とて同じである。私が期待したものは到来しないし実現されないことも多いし、逆に期待もしないものがいくらでも到来するからである。ならば未来存在はいかなる在り方をしているのか。現在位相の蛹にとって未来位相の成虫はどんな在り方をしているのか。これまでの昆虫学者の観察で幼虫からいきなり羽化して成虫になったという試しはない。蛹化を経て一定の蛹期を経なければ羽化しないのである。このことは内蔵するプログラムによる本性とこれまでに獲得された諸々の性質の総体としての能力が仕上がらないことには次の位相を迎えられないことを意味している。幼虫には羽化する能力は未だ備わっていないのだ。奇妙に響くかもしれないが、未来というのは現在の能力が前方に遠近的に伸びるそれなのである。未来存在が<sup>可</sup>能<sup>的</sup>存在といわれるなら、この現在の能力の伸びのことを指しているのである。現在の能力によって派生するものといってもよい。この意味では未来存在は無ではない。未来位相を基礎づける力は現在位相の能力である。「遠近的」というのは、現在位相に近いところほど能力が大きく伸び、遠方に行くに従って能力がとどきにくくなるか先細るという意味である。次のような比喩を用いても大過とはなるまい。いくら視力の強い人でも、霧がかかっているような視界なら、近い処ほどよく見えるが、遠い処ははっきり見ることは出来ない。遠方をはっきり見るためにはその人が前方に移動するしかないのである。この比喩を用いるの

は、現在位相を光に喩え、過去位相を影に喩えているからである。視る世界は光なくしては何も見えない。未来の不確かさを表現している言葉は光に関係している。「お先真暗」はまことに的確な表現である。

よくこんな表現に出くわす。「あの人は将来が約束されていたのに惜しいことをした」——これはその人が順調に行けば大物になったのに、ある外的な事故によってその可能性が絶たれたことを指している。つまりその人の能力からすれば大きな仕事を将来なし得たということであって、その人が大志を抱いたとか未来に大きな期待をかけたとかとは違うのである。能力に応じない野心は行き着く処空想や妄想にすぎない。自分の力量の射程内でしか未来を手元に引きつけ得ないのである。しかし、能力が前方にどれだけ伸びるかは外的条件と関係している。蛹期において、異常な外気温に出くわすか、天敵の餌となるならチョウは未完で終る運命にある。それを阻止するため蛹は小枝と同色となったりこの葉に似せたり、越冬する蛹なら冬眠状態をつくり出す工夫をしているのである。これらもすぐれた能力である。生物の能力は常に外界との関係における能力であり、その可能性は論理的可能性でもなく、純粹可能性でもなく、まさしく経験的可能性である。現在においてこそ生物は外界と実的關係を取り結んでいるのである。位相の機能はまさしく現在の活動である。位相がどんな機能質を有するかは次節の時間質で詳述する。過去位相と未来位相との関係は直接的な基礎づけ被基礎づけ関係にはない。現在位相の媒介を経てしか意味をもたない。ここに現在位相の中核的位置づけがあり、現在位相を中心に前後の位相を考えなければならない理由がある。

以上、現在位相，過去位相，未来位相の三者の關係と在り方の違いに論及したが、最後に一時間の対象  $\langle \xrightarrow{S} \rightarrow \rightarrow \rightarrow \xrightarrow{E} \rangle$  の位相の全推移形態，つまり展相について論及しよう。チョウの二カ月間の一生と比べれば，月相の二カ月間の推移は極めて周期的で機械的で漸次的で単調である。満月から次の満月までの推移の行くえは予測されてしまう。それに反してチョウの変身に次ぐ

変身は極めて変則的で驚きの連続である。それでも全過程の中で各期をよく眺めればいくつかの推移形態に気づく。まず始めに間隔質に注目してみよう。



卵期 A と蛹期 C とはほぼ同じ期間、幼虫期 B と成虫期 D とはほぼ同じであり、そして A と C が静的であり、B と D とは動的である。もし（短一長）、（静一動）をパターン化するなら、全過程は  $\langle \underset{S}{(A \rightarrow B)} \rightarrow \underset{R}{(C \rightarrow D)} \rangle_E$  となり R' は R の反復となる。ここには周期質が認められ、単純化すると  $\langle \underset{S}{R} \rightarrow \underset{E}{R'} \rangle$  となる。(R→R') は (A→B) や (C→D) の下部位相の上部位相となる。B をそれとして取り出すと、図式 I で見られるようにイモムシの成長段階 b<sub>1</sub>, b<sub>2</sub>, b<sub>3</sub>, b<sub>4</sub>, b<sub>5</sub> があり、さらに下部位相を成している。生活空間の視点から見ると卵期から蛹期までは樹上にとどめられている。成虫期は自由な空間である。すると  $\langle \underset{S}{[(A \rightarrow B) \rightarrow (C) \rightarrow D]} \rangle_E$  のような推移形態を見て取ることが出来る。ここにも下部位相と上部位相の層序的構造が目立つ。このような諸々の位相の全過程における推移形態質を筆者は展相質と呼ぶ。

展相質がどんな質であるかを示すために、二カ月間のチョウの一生、二カ月間の月相の推移、時間尺度としての時計の刻みの推移の三者を比較することにしよう。二カ月間の月相の推移を単純化すれば、 $\langle \text{満月} \rightarrow \underset{S}{\text{新月}} \rightarrow \text{満月} \rightarrow \underset{E}{\text{新月}} \rightarrow \text{満月} \rangle$  で同じパターンが反復されよう。このような規則正しい反復はチョウの一生には見られない。チョウの各期の推移は先きに見たようにもっと複雑で派手である。月相の周期的推移でチョウの一生を計測することは出来るが、その逆は無理である。単純な展相で複雑な展相を計することは出来るが、複雑な展相で単純な展相を計することは出来ない。月相の推移の二カ月間を計測している尺度は地球の一回の自転による昼夜の交替である。一日、二十四時間が計時尺度となる。図式 I で示した  $\square \square \square \square \square \square \square \square \square \square$  である。これは時計の針の等速度の空想的表示にすぎないが、空間的には等間隔の目盛りとな

る。一日は計時尺度の単位となる。二カ月は六十日となる。今空間的な尺度、物差しを考えてみよう。物差しの精確さはどの目盛り間隔をとっても皆同じ長さであることによる。そして物の長さを測る時、どの目盛りをも始めとしてもよいということであり、必ずしも物差しの先端から計る必要は何もない。別言すれば、物差しには生物に見られるような本来の始めと終りがある構造が見当たらないのである。時計の針の等速度の刻みにも同じことがいえよう。等間隔的刻みはあっても本来の始めと終りのない、いわば単調な規則的な推移しかない。のっぺら棒の、無表情の推移である。

このような比喩が通じようか。今、長巻きの生テープに等間隔的に一定のパルス音を録音しておいて、それを等速度（この等速度をつくることは大変難しいが）で回転させて、再生音を出すなら、それは等間隔の時間経過を示す刻み音となろう。この音系列にわれわれは拍子やリズムのパターンを認めることが出来るであろうか。否。このパルス音は等間隔性以外の構造をつくらないから、およそ構造といった類のものではなくなるのである。従ってパルス音は数量的に表示可能である。デジタル時計はまさしくこのことをしているのである。一日を二十四等分にしようが、更にそれを六十等分にしようが等速度性が保たれさえすれば勝手な約束事にはかならない。しかし、人はこのような刻の細分化から現在を幾何学的点の如くに表象することになるのである。

時計の針の刻みの推移はおおよそ展相をつくりだすような推移形態をとらない。なにしろどこが始めでどこが終りであるかわからない以上、時間的对象とはなり得ないからである。この特長が逆に計時の尺度として生きてくる。今では月相の推移形態で計時測定することはないのは、原子時計の方がもっと周期的で精確であるからである。チョウの一生は月相の推移や時計の針の刻の推移よりはるかにリズム、変調、テンポに富んでいる。

ところで展相と関連して時間的对象のいわば「堅固性」の問題が生じる。物的対象物としての石は外力による破壊をはねつけるような内部的組成をも

っている。それと同じように、時間的対象も恰も障壁を築くかのように外的攪乱作用をはねのける内部的構造をもつようである。チョウの例でいえば、A, B, C, Dの各期はしかるべき継起順序を保って連続的に推移し、邪魔を排してしかるべき一過程たろうとする。それにはまず各期の担い手としての推移主体（卵、イモムシ、蛹、チョウチョウ）が各期の外的状況に応じて外敵から身を守る仕組を持ち合せていなければならない。さもないとどこかで中断して未完に終る可能性がある。イモムシが肉角を出して外敵を威嚇したり、蛹やチョウチョウが自らを木葉に似せて擬装するなどのことは各期において身を守ることに尽きず、あるべき全過程を全うするために講ずる手段である。こうもいってよければ自分の持ち時間を貫徹するためにとる外的攪乱作用排除の手である。チョウはそのための情報プログラムを内蔵しているのであろう。全うすべき自分の持ち時間は生物の類によって種々様々であるが、その実現は外界との事実関係にある。自分の持ち時間をまとまった有機的一全体に仕上げるには、諸々の位相の組織化や層序化が不可欠である。これが時間的対象にいわば「堅固性」をもたらす。この点で時間質の内の組織質、継起質、層序質、展相質等の上位の時間質が大きく関与している。

また時間芸術作品の場合、如何に内的推移構造の緊密化をはかっても外的攪乱作用を抑える工夫をしなければならぬ。例えば音楽演奏なら外部からの雑音を防ぐために障壁を設け、響き渡る音響空間をつくらないと効果的でない。これは時間的対象をそれとして純粹に守るための必要手段である。場合によっては人は音量エネルギーをあげて外音を打ち消さなければならぬ。

今一つ注目すべき事柄がある。それは得点を競うスポーツ一般にいえることだが、諸々の位相が離散的で不連続でも一つのまとまった一過程（一試合）として把えられる。この不連続性をつなぎ合せ、一つの全体に締め括る籠に相当するものは、間主観的約束言としての規則ルールであると思われる。時間的対象たらしめる約束言の機能については第3節の〈コトの諸相〉で論及し



たい。

—つづく—